

歌と儀礼

——沖永良部島の三十三年忌調査報告——

酒井 正子

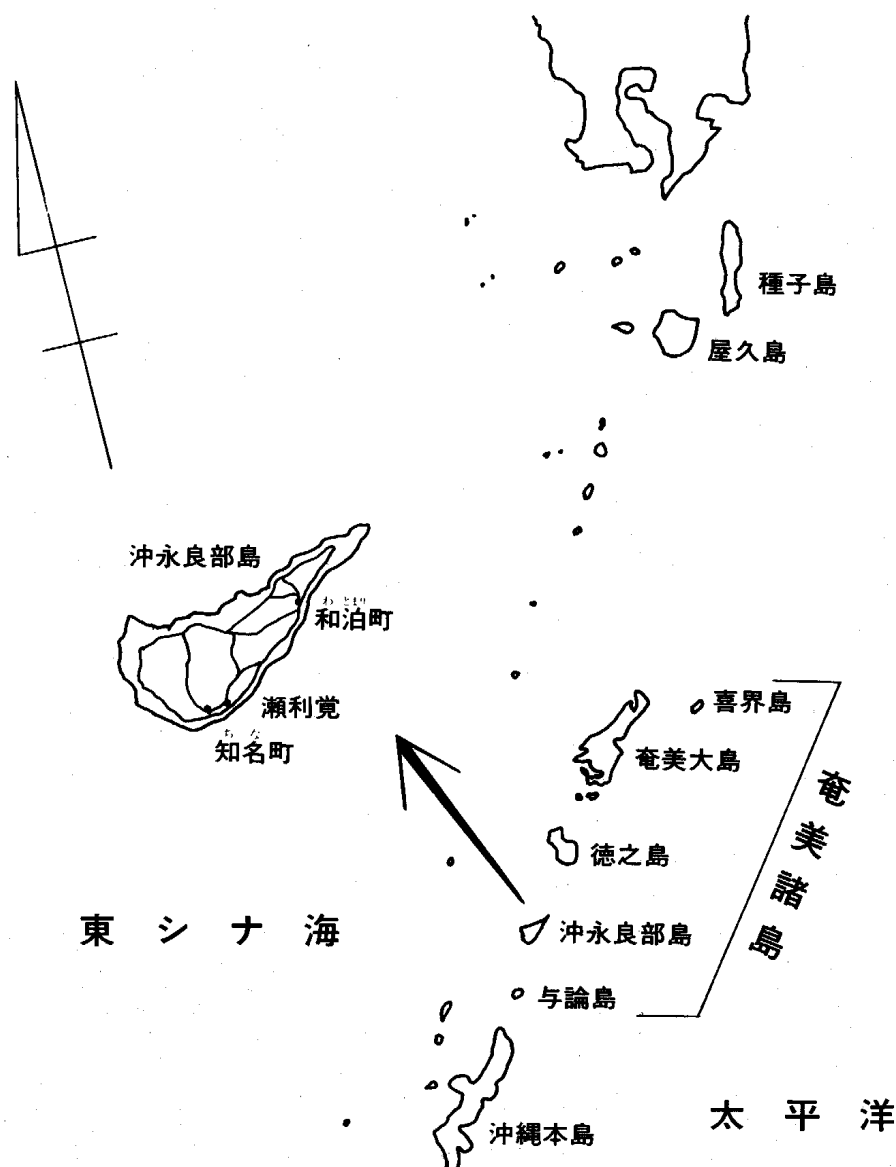
一、はじめに

沖永良部島の三十三年忌は、△念仏（ミンブチ）▽を歌い、カネ・太鼓で囃しながらにぎやかに墓まで死者の霊を送っていくことで知られる。△念仏▽が歌い踊られることはしばしば言及されるが、歌と儀礼の対応関係に踏み込んだ考察はこれまでなかった。筆者が九一年八月に調査した知名町瀬利^{せり}覚^{かく}の三十三年忌では、歌詞の内容を模擬的に演ずるような形で道行がおこなわれていた。本稿はその点について報告し、テキストの成立について若干のコメントを加えるとともに、儀礼の全体についても記録にとどめておくものである。

沖永良部島は、亜熱帯性気候の奄美諸島南部に位置する隆起珊瑚礁の平坦な島で、知名町と和泊町の二町からなり、人口は約一・六万人。昭和五〇年代以降、近代的農業経営の進展がめざましく、人口流出に歯止めがかけられている。特にえらぶ百合・フリージア・えんどうなど換金性の高い花卉や輸送野菜の複合栽培と、徹底した品質・出荷の自主管理体制が確立し、年間を通して高い農業所得を得ている。島はくまなく耕され、人々は夏期には夜八時頃まで明るい南島の長い

一日を、畑仕事に精を出す。

こうした近代農業の成功の一方で、伝統的な農耕暦は意味を失い、暦に根ざした農耕儀礼や民俗行事は衰退している。奄美北部（大島、喜界島、徳之島）で盛んに行われる豊年祭や夏の折り目行事は沖永良部島ではまったくみられず、そうした共同体行事で行う八月踊りなどの集団の芸能もない。その空白を補うかのように、沖永良部島では家単位で主催する祖先祭祀が年々盛んである。年忌（法事）のことはチャート⁽¹⁾といい、一・三・七・十三・十七・二十五・三十三年忌がある。故人の命日、またはその前後に行うのが本来だが、集落によっては正月と盆に日を決め（一月五日と八月一四日）、一斉に行う風習もある。これらを群年忌祭



(ブリチャート)と呼んでいる。

年忌のうち、特に親戚を招いて盛大に行うのは一年忌と三十二年忌である。中でも三十二年忌は、「止めチャート」「祭り止め」「祭りあげ」であり、これを最後に神になるとしてとりわけ盛んに祝う。「ユダハニ(子、孫、ひ孫)まで祀らせる」としてミ―腹(女方)ウー腹(男方)の親族が勢ぞろいするのである。親戚が多い場合は、たびたび招くのも迷惑だとの理由で、何人かの年忌をまとめて行うこともある。また仕事や準備の都合で三十二年目に行えない場合は、先に延ばすのが常である。延ばせばその分だけ祭祀時間が長くなるので先祖が喜ぶ、という。しかし一方では、「三十二年忌がない」と言いながら祖先の霊が墓の周囲の石の上で待ちわびているともいわれ、時期がきたら、早い機会に無事とり行わなければ、との気持ちが強い。

二、儀礼の概要

瀬利覚(ジッキョ)は人口九九六名(一九九二年現在)。知名町では三番目に大きな集落で、盆や年忌が盛んな所として知られる。年忌はまとめて行うブリチャートの方式で、一―八月前半が命日の人は八月に、八月後半―一二月が命日の人は一月に行う。その日は集落内で幾つもの年忌が重なり、関係者や帰省客でにぎわう。筆者が参列を許されたのは、盆の中日の八月一四日にF家で行われたものであった。主催者T(主婦)の父の三十二年忌と母の十二年忌を兼ねており、前日の夕刻(迎え盆)には墓から霊を迎え、夕食膳(イージヌ)を供えて前夜祭が行われた。「三十二年忌の祭りをするから家にいらして下さい」と墓に霊を迎えに行くと、「自分のために皆集まって待っている」と本人は自慢に思っていて来るのだという。

当日は朝食膳、昼食膳(アシジヌ)が供えられた後、午後三時から祭りの開始である。空は雲一つなく晴れ渡り、濃紺

の海が彼方にみえる。太陽が容赦なく照りつける酷暑の中、近所総動員で膳の準備にあたる。招待客は、主催者の両親の(2)またいとこの範囲までの子・孫・ひ孫合わせて約四〇名で、本土からも多数駆けつけた。暑さのため集まりが悪く、参会者が揃ったのは四時ごろになった。

この日の三味線・歌い手は瀬利覚在住の村田武俊氏(昭和七年生)。司式役も兼ね、儀礼を進行させる重要な役割を演ずる。年忌の際には特に僧侶などは呼ばず、歌や踊りも親族の手でするものだという。村田氏も故人の遠縁にあたる。(3)一同揃ったところで村田氏は「これより始めます」と挨拶、△御前風▽のふしで、まず祭壇に向かい、故人に歌い掛ける。
△三十三年忌の祭りは・待ちかねてうたむ／今日ぬゆかる日に・まちておいしゃぶら

(三十三年忌の祭りを待ちかねていたことでしょう。今日のよい日に祭ってさしあげましょう)

次に客に向かう。

△はさどうめぬ御客・御膳うみかぎり・御膳済まちからや・送りうにげ

(沢山おいでのお客様、御膳を召し上がり、済まされたら送りをお願いします)

と△御前風▽で歌った後、「吸物の蓋をおとり下さい」とすすめ、宴が始まる。一族の長老による親族の紹介、献杯などがあり、故人の思い出などが話される。この間、お椀が二度出され、その都度祭壇にも同じものが供えられる。

法事は膳祭り(じぬまちり)ともいわれ、接待はていねいである。祭壇には三人分の膳が出されており、故人二人の膳のご飯は、白い紙面(ボージバネ)で覆われる(写真参照)。まん中の膳は寄せ膳(ヨイジン)といって、無縁仏のためのものである。法事には、無縁仏や悪霊も祀ってもらいたがり、寄ってくるのだという。宴の終わりごろ、参会者は祭壇の供え物から墓へ持つて行く分(ハチバチ)をつけわけ、次々と参拝をすませて道行の準備をする。

六時頃、赤飯と味噌汁を最後に膳が片付けられると、いよいよ「送り(ウクリ・ウンジャク)」である。祝いにつきもの

の踊り三曲に続いて△念仏▽の道行となる。△念仏▽は墓までの道行の出発・道中・到着時に歌い踊り続けられる（この時歌われた歌詞の書き取りは三を参照）。

まず祭壇に向かい、△御前風▽で故人に歌い掛ける。

△天気さりざりと・海山ぬちゆらさ・今日ぬゆるる日に・お供しやびら

（天気晴れ晴れと海山が美しい、今日の良き日にお供しましょう）。

座敷に向き直り、踊りが始まる。△御前風▽△花ぬかじまやー▽（以上扇踊り）△みやらび▽（四ツ竹踊り）の三曲である。踊り手三名は同集落在住の女性で、歌も振りも琉舞ではなく瀬利覚流になっている。

次に△念仏▽に移る。カネ叩きの念仏僧が伝えたときされる、宗教的な口承の叙事歌で、沖縄の△継親（ままうや）念仏▽と同系統のものである。物語は「継母にいじめられた幼子が、亡き実母を尋ねてさすらう。老人に行き逢い、教えられて竹の管からのぞき見るとはるか冥界に母がみえる。家に戻るようせがむが、すでにこの世の者ではない。朝夕と盆に祀ってくれときとされて帰される」というもの⁽⁵⁾。テキストの内容を追想し、母を尋ねる旅と墓までの道行を重ね合わせるような形で儀礼は進行する。以下三にある歌詞と対応させながら経過をみてゆくことにしよう。

●第1節△さくらのだんじ……以下第10節までは物語の導入部。祭壇の故人に向かって歌い、母の死と、墓に置かれたその遺体が朽ちるさまが回想される。

●踊り手が登場し、座敷に向き直って、道行（別称「五ち頃」）に移る。△いちちぐるぬとうちに……に始まる第11—15節の、旅の前置きの箇所が歌われる。踊り手は座敷内を左に三度まわり、母を尋ねる旅の始まりを象徴する。

●そのまま一同は縁側から外に出て列を組む。ちようちん・シュビ（がじゅまるの若枝に白い切り紙をつけた霊の依り代）・供物を先頭に、三味線、踊り手三人（扇二人、四ツ竹一人）、ついで紅白の旗をつけた竹竿を持った男性五組が二列に並び、

他の参会者はそのあとにつく。第16節のへうりから泣く泣く浜下りてい……の文句とともに、一同は墓への道を歩みだす。へヒヤルガヨイサ……のハヤシの箇所は全員で歌い、この間踊り手は扇と白いタオルをひるがえし、四ツ竹を打ち、竹竿の組は竹を打ち合う。母を冥界に尋ねるくだりが歌われ、物語はクライマックスとなる。第50節まで歌うとまた第11節に戻って繰り返される。二〇分ほど歩くと、海沿いの墓地に出る。途中、へ念仏で送るもう一組の一行に行き逢った。

●墓が近くなると第51—52節を歌い、あの世にいる親との再会を思いながら墓所に入ってゆく。

●歌は開始に戻り、踊り手は出発時と同じく、三度墓所内をまわる。第1節を歌って出発時を回想したところで、道行(旅)も終わる。

一同水と線香、供物を供えて墓参をする。シュビは墓の後方に供えられる。これを伝って先祖は天に昇るといわれている。その後墓碑の前で出発時と同じ踊り三曲をして、へ御前風で

へ切り捨てる松ぬ・緑さしならん・後生(ぐしよ)にめぬ親や・戻しならん

(切り捨てる松はもう生えてこない。あの世にいらした親は引き返すわけにはゆかない)

と歌う。これは今までは行ったり来たりしたが、祭り上げだから完全に成仏して下さい」との気持ちを込めるといふ。そして「最後のおわかれですから、全員墓所内に入って下さい」との呼びかけに応じ、全員が墓に向き合って座る。歌い手が一同を代表して「三十三年忌を、親族全部招待してお祭りしてさしあげました。どうか晴れ晴れと受け取って下さい」との趣旨を島口(方言)であいさつ。続いて一同礼拝し、全行事を終了する。

墓所を出る際には各人神酒の杯を受ける。墓所に敷かれた白砂についた足跡は、箒できれいに拭われる。帰り道はへアンチャメグワなどを口ずさんで三々五々家に帰り、その夜は主催者の家で祝宴となる。へ天気さりざりと……という

文句にふさわしい、海が美しくみえる快晴の一日だった。

三、歌 詞

△▽は曲節名、() は大意・試訳、☆はハヤシの反復を表す。

踊り歌三曲

△御前風▽

きゆうぬふくらしやや

なうにじやなたてる

ちぶでうる花ぬ

ていうちやたぐとうヨンナ

備考：沖繩古典音楽の祝典曲。琉歌調四句体の下句反復型。沖永良部島では沖繩よりややテンポが速く、シンプルな旋律となっている。

△花ぬかじまや▽

1 花ぬかじもいや

はじちりていみぐる

わみやどうしちりてい

あしびむどうら ヤイスリサティムシユラヨ

2 梅ぬ木ぬくゆだ

今日の喜ばしさを

何にたとえようか

つぼみの花が

露を受けて花ひらくようだ

花の風車が

風につれて巡るように

私は友達をつれて

遊んでから戻ろう

梅の木の小枝は

わが枕やしが

鶯ぬとうりぬ

くまるしぬき ☆

△みやらび▽

1 みやらびぬ袖ふり

めんさいしゅーたにかかゆらど

テントウルテンヨ シトウルトウテン ハリヨ一ノ

イノクシ

2 とうりていくやいちやたり

はれていしゅーざやなおされる ☆

△念 仏▽

ナマミンダ ナマミンダ ミナブトウキ

ヒヤルガ ヨイサー トーヨイサー トートウ

ナマミンダ ミナブチ ミナブトウキ ☆

1 さくらぬ だんじや はな ぐざる

ヒヤルガ ヨイサー トーヨイサー トートウ

2 くるぶき あんまに していらいてい ☆

3 していらいてい うかゆるる わみ ひちゆい ☆

私の依り所なのに

鶯の鳥が

止まるのが辛い

若い女性の袖を振る姿が美しいので

主人が心ひかれる

風が風ぎ離れた友に会い

晴れて祝いの座に呼ばれる

南無阿弥陀 南無阿弥陀 弥陀仏

ヒヤルガ ヨイサー トーヨイサー トートウ

南無阿弥陀 南無阿弥陀 弥陀仏

桜の男児は花でござる

ヒヤルガ ヨイサー トーヨイサー トートウ

くるぶき(黒幕か)母さんに捨てられて(死なれて)

捨てられて置かれる「のは」私一人

4 ぬぬぶき やかたに うくらりてい ☆
 5 とうむれる にんじゆは うじよまでいむ ☆
 6 くるしん きしゆる くぬかしお ☆
 7 ちちひに きたしゆる わみ ひちゆい ☆
 8 あさゆさ きたしゆる くるかしら ☆
 9 みししや ぬはらぬ つちとう なる ☆
 10 みふにや いばやぬ いしとう なる ☆
 ナムアミンダ ナムアミンダ ミナブトゥキ ☆
 ナムアミンダ ミナブチ ミナブトゥキ ☆
 11 いちちぐるぬ とうちに うやに していらい ☆
 12 ななちぐる なたとう うや うみんじやち ☆
 13 はるばる さとうざとう とうめーたりどう ☆
 14 わうやとう みちゆる ちゆ ちゆいらむ ☆
 15 わうや んちゆぬ ひちゆむ ちゆいらむ ☆
 16 うりから なくなく はま うりてい ☆
 17 あんまよう あんまよう あびたりどう ☆
 18 ちじゆやー なく くいばかり ☆
 19 きしに うちゆる なみぬ うとうばかり ☆
 20 うりから よいよい むどうたりば ☆
 21 むかしうしゆすーぬめーに みち いきよてい ☆
 22 たんでい うしゆぬめー うや かたり ☆
 23 いちちぐるぬ とうちに うやに していらい ☆
 24 ななちぐる なたとう うや うみんじやち ☆
 25 はるばる さとうざとう とうめーたりどう ☆

布葺き館(墓)に送られて
 弔い下さる人数(人達)は「墓の」御門迄も
 くるしん きしゆる(未詳) くるかしお(黒頭か)
 月日に朽たす「のは」私一人
 朝も夕も朽たす黒頭(髪)
 御肉は野原の土となる
 御骨は岩屋の石となる
 南無阿弥陀 南無阿弥陀 弥陀仏
 南無阿弥陀 南無阿弥陀 弥陀仏
 五つ「の」頃の時に親に捨てられ(死なれて)
 七つ「の」頃になつたので親を思い出して
 原々 里々を尋ね(探し)たけれど
 我が親と似た人は一人もいない
 我が親を見た人も一人もいない
 それから泣く泣く浜に下りて
 母さんよ 母さんよと叫んだけれど
 千鳥が鳴く声ばかり
 岸に打つ波の音ばかり
 それからそろそろと戻ったところ
 昔御主の前(大翁)に道で行き逢って
 どうぞ 御主の前(翁)よ 親「の事」を語ってくれ
 五つ「の」頃の時に親に捨てられ
 七つ「の」頃になつたので親を思い出して
 原々 里々を尋ね(探し)たけれど

26 わうやとう みちゆる ちゆ ちゆいうらむ ☆
 27 うら うやぬ なまらくし みらりゆみ ☆
 28 くだぐし ななちり ちりちみてい ☆
 29 みぎぬ すでいに うしかくち ☆
 30 ひでぬ すでいから ちゆみ うがでい ☆
 31 ぬがよ あんまよ くまに めろ ☆
 32 ぬがよ なしぐわ くま きちやろ ☆
 33 でいかよ あんま やどう むどうら ☆
 34 あちやや ままとうめてい ひれが ならむ ☆
 35 あしちげぬ ありわどう むどうらゆる ☆
 36 わみむ あんまとう くまに うゆん ☆
 37 ぬがよ なしぐわ あね いるな ☆
 38 うら ちゆい ながぐし たちち うかば ☆
 39 いちじよ ななじよに ひがさ さち ☆
 40 かびらぬ きゆん きやにや うきとうゆり ☆
 41 なちぬ なちぐり あみとう (う) むな ☆
 42 ふゆぬ ゆきしむ しむとう うむな ☆
 43 かなしあんまが なた とうむてい ☆
 44 しちがち ぼんまち まちていくいり ☆
 45 うりから よいよい むどうゆたら ☆
 46 みちぬ まんなに んまぬ たちゆてい ☆
 47 うりが ずー とうてい ゆみや しこーてい ☆
 48 ちゆはたち はちちゃら うや みじゃち ☆

我が親と似た人は一人もない
 お前の親がなま楽(簡単の意か)して見えようか
 管串(竹管)を七切れ 切りつめて
 右の袖に押し隠し
 左の袖から一目拝んで
 何かよ(どうしたの)母さん 此処にいらつしやるのは
 何かよ産し子(愛し子)よ 此処に来たのは
 さあ 母さん 宿(家)に戻ろう
 父さんは継母を娶ったのでつきあいが出来ない
 足関節(足)が有ってこそ戻られる
 私も母さんと此処に居る
 何かよ 産し子よ あんなには言うな
 お前一人長串(竿)を立てて置くから(寿命を長くしておくから)
 一門 七門に日傘を差して
 蝶が来る際には「母親と」受けとつて
 夏の夏雨を雨とは思ふな
 冬の雪霜を霜とは思ふな
 愛しい母さんの涙と思って
 七月の盆祭りを祭ってくれ
 それから そろそろと戻ったら
 道の真中に馬が立っており
 それの尾を取って弓矢を作つて
 一はじきはじいたら親を思い出し

49 たはち はちちゃら うや わしり ☆
 50 しちがち ぼんまち まちてい おいしら ☆
 51 ぐしよぬ うじよや いしんじよ
 わんなおうぬ じよや かなじよ ☆
 52 うり あきてい みりば わうや みゃゆら ☆

二はじきはじいたら親を忘れ
 七月の盆祭りを祭って差し上げよう
 後生の御門は石の門
 閻魔王の門は金門
 それを開けてみれば 我が親は見えるだろうか

(『日本民謡大観』所収。一部改変。)

備考…別名△桜のだんじ▽△ヒヤルガヤツサ▽とも呼ばれ、三十三年忌に墓まで送る道行の出発・道中・到着時に、三味線につけて賑やかに歌い踊られる。長老の男女が歌い手だが、現在は伝承者が少なくなり、テープですますことも多い。和泊町と知名町ではハヤシ詞や奏演形態に若干の違いがあり、和泊町ではカネ太鼓ではやすが、知名町では竹竿、四ツ竹をうち鳴らす。徳之島の△まんま口説▽も同じ物語だが、幼子が継母にいじめられるくだりや、やっと巡り会った実母の変わり果てた姿の描写がより具体的に生々しい。

四、おわりに

以上みてきたように、沖永良部島の三十三年忌においては歌や踊りが儀礼の重要な構成要素となっている。死者の霊や参会者への呼掛けは終始△御前風▽によってなされ、儀礼の進行の節目をしるしづける。「送り(道行)」の部分はそれ自身独立した構成であり、△御前風▽を含む踊り歌三曲に続き△念仏▽が奏される。その際、亡き母を慕って尋ね歩く旅が、踊り手と参会者によって象徴的に演じられる。終着点の墓前では、出発時を逆にたどる形で踊りが再現される。

さらに、△念仏▽のテキストとパフォーマンスの細部は対応関係にある。第1—10節は祭壇の死者に向かい、母の死に

よる悲劇の始まりを回想し、第11—15節は室内で踊り手が三巡して幼子が訪ね歩くさまを演じ、第16—50節は家から外に歩き出す墓までの道行によって、冥界をのぞき見る旅を表象していると解釈されるのである。ところでこの口承のテキストと類似のものが、沖縄の古い念仏歌詞集の中に見いだされる。池宮正治氏が「県史資料」として報告した歌詞集で、大正三、四年頃首里で収集されたという充実した貴重な記録である「池宮：1930：206—242」。その中にこのテキストと類似のものが二篇見いだされるのである。即ち「4。梅のだんぎ」の前半部分が第1—10節に、「2。まま親念仏」が第11—50節に相当する。さらに第51—52節は、与論島の△道いきんとう▽などでは単独で歌われる琉歌調の歌詞であり「酒井：1991：133」、別個につけ加えられた可能性が強い。つまりこのテキストは、沖縄の二つの念仏歌をもとに、沖永良部島での細部の変更と付け加えにより成立したのではないかと考えられるのである。なお歌手の村田氏は冒頭部分を「ミンプチ・桜ぬだんじ」、第11節以下を「ミンプチ（道行の唄）五ち頃」という風に呼び分けて区別するが、沖永良部島その他集落では同様のテキストを一括して「桜のだんじ」と呼び、一つながりのものとする人も多い。

こうしたテキストの構成と儀礼のパフォーマンスの対応関係から、次のような推論も可能ではないだろうか。かつて島々を巡って歩く放浪の念仏者（ミンプチャー）が訪れた際は、この二つは前出の「県史資料」にあるように別々の念仏として歌われ、演じられていた。のちに島人自身の手で行われるようになって、二つが組み合わせられ、今日みるような形になっていったというものである。また、長い年月の間には島に定住する念仏者もいたかもしれない。大和（日本本土）渡来とされる遊行の念仏聖の足跡は、史実に乏しく謎の部分が多いが、その琉球弧での展開は様々にたどられるのである。

念仏 (ミンブチ)

$J = \text{Ca.70}$

採譜：酒井正子

三味線

歌

(ハヤシ) ナ マ ミ ン ダ - ナ マ ミ ン ダ ミ - ナ
1. さ く - ろ め - だ ん - じ や は な -
3. し て - り て - う か ゆ ま わ ヨ -

三味線

カケ 声

一ツトア一 ヒヤルカ ヨサ - ト ヨサ - ト ト ナ ミ
- ゴー 3 ヒヤルカ ヨサ - ト ヨサ - ト ト 2. く ん -
- ゴー 1 ヒヤルカ ヨサ - ト ヨサ - ト ト 4. め め -

[illegible]

三味線 *coda* *rit.*

〔実音〕 短 7 度低い

〔備考〕 1. 細かいヴァリエーションは省略した。

2. 四ッ竹は三味線に合わせ、♪♪のリズムをくり返す。また、竹ざおは、カケ声部分で、♪♪のリズムを打つ。

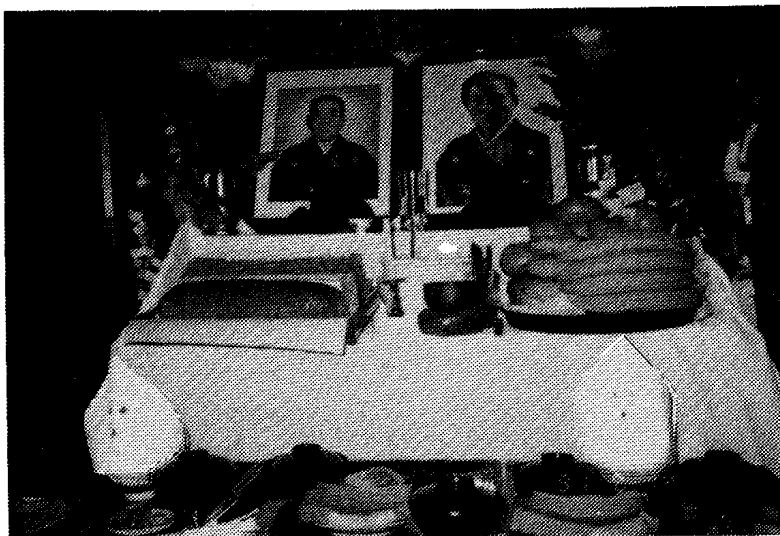
〔注〕 こののちに第11～13小節と同じカケ声が入る。以上を第52節まで反復する。

注

- (1) チャは「茶」、トは「トート」という唱え言葉からきているのではないかとされる。法事の際まず神前に茶の初をあげながら「トート、トート」ととなえるため「チャート」という熟語になったのではないかという。〔永吉：1981：101〕
- (2) どの家も八〇人分くらいの膳や吸物碗を常備しているという。
- (3) 十三年忌のTの母と、村田氏の父がまたいとこにあたる。なおTの母は、やはりすぐれた△念仏▽の歌い手であった。
- (4) 踊り手はいないしは三名である。奇数はめでたいことを呼び込む、という考え方が琉球文化圏一帯にみられる。奇数は不完全で、もう一つ合わさって、対を作って(偶数)完全になろうとする、という理由からだといわれる。
- (5) あわれな物語に涙を絞り、最後に仏の効徳を説く念仏説教の土着化した形が見られ、歌詞は個人差が大きい。音楽様式も語りの系統に属し、A B 旋律の繰り返しにのせてストーリーが展開される。

参考文献

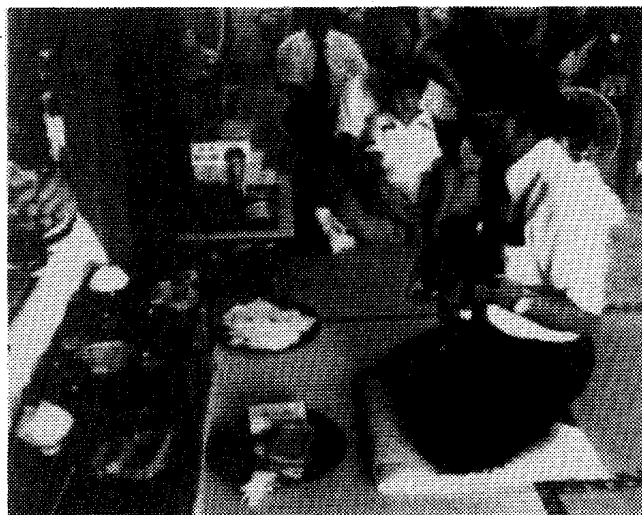
- 永吉 毅 一九八一『えらぶの古習俗』道の島社
- 一九八一『沖永良部島調査報告書』沖縄国際大学南島文化研究所
- 大森元吉他(編)一九八四『文化人類学調査実習報告書』第五輯 国際基督教大学
- 池宮正治 一九九〇『沖繩の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー—』ひるぎ社
- 酒井正子 一九九一「徳之島の葬歌の系譜…資料と予備的考察」『徳之島郷土研究会報』一七
- 日本放送協会(編)一九九三(予定)『日本民謡大観奄美諸島篇』日本放送出版協会



祭壇

手前の供え膳のご飯は
ボージバネ（紙面）で
おおわれている。

参会者
男性は南側に
女性は北側に
分れて座る。



祭壇に向かって
＜御前風＞を歌う



座敷内での踊り



道 行



道 行
墓の入口附近で。

墓前での踊り

